

<序文に代えて>

歴史を繰り返してはならない！

アフガニスタンは過去30年を超える年月にわたり数多くの政治的社会的事件を目撃してきました。この間に生じた諸事件を詳細に分析し精査すれば相互の弁証法的な関連が立証されます。20年前にこの回想録を書き始めた時、この記録が対象としている1980年代のアフガニスタンを支配した暴力的なやり方は二度と繰り返されることはないだろうと私は信じていました。しかし不幸なことに、私は間違っていました。1992年から2001年にかけてアフガニスタンにおける政治的軍事的シナリオには何か変化があったのでしょうか。ソ連が10年がかりのゲームから降りた1989年、今度はアメリカ人がそれにとって代わりゲームを始めました。ソ連赤軍がアフガニスタンにおける戦闘で繰り返してきた政治的軍事的シナリオとどこか変わるところがあったのでしょうか。新世紀初めの2001年、合衆国はアフガニスタンに降臨しました。現在では43カ国から派遣された15万人以上の兵力がアフガニスタンに展開し戦闘を繰り返しています。

2004年に出版した『アフガニスタンの歴史分析』と題する書物のなかで私は次のように書きました。

「さまざまな理由をかかげた占領者がアフガニスタンを席卷した。アケメネス人、ギリシャ人、アラブ人、セルジューク人(トルコ人)、チンギス・ハーン、チムール、バーブル、シャイバネ人^(注)、イギリス人、ロシア人、そして今、アメリカ合衆国とNATO諸国。どの侵略も国土に多大の被害をおよぼし人びとに悲惨と苦難とをもたらした。

5000年以上前から幾多の侵略者、部族、民族がアフガニスタン領内を通過した。マルコポーロが旅してからは多くの隊商がアフガニスタンを行き来した。彼らは西から東へ、あるいは東から西へ、時には南から北へ、北から南へとアフガニスタンを蹂躪した。」

大英帝国はアフガニスタンに対して40年間に3度、植民地戦争をしかけました。1839年からの第1次アフガ

ン・イギリス戦争、1878年からの第2次アフガン・イギリス戦争、1919年の第3次アフガン・イギリス戦争。これらすべての戦争でイギリスは致命的な敗北を喫しました。その結果、アフガニスタンは1919年に独立を勝ち取りました。

独立宣言から60年がすぎた1979年末すなわち1980年の前夜にソ連赤軍はアム・ダリア(河)を渡りアフガニスタンに北から侵略しました。数千のアフガニスタンの村や町は侵略者と自由の戦士による流血の戦場と化しました。その戦争は10年続きました。

侵攻がソ連政府に与えた衝撃は激烈でした。ソ連は経済的に莫大な損害を被り1万数千人の兵士の命を失いました。最終的にソ連赤軍は敗北しアフガニスタンから去りました。10年におよぶ戦闘の結果、2万4000の村々が廃墟となり、200万人以上の国民が命を落とし、500万人もが難民となって国外に出て行きました。ソ連は不慣れた戦争により莫大な損害を被り、国の指導部は世界共同体から糾弾されました。ソ連崩壊はアフガニスタンにおける不正義の戦争の直接的な結果でした。侵攻十数年後冷戦は終結を迎えました。

超大国がひとりアフガニスタンを残して去って行った後、隣国がその空隙を埋め内政に介入してきました。特にパキスタンは自国の傀儡政権をアフガニスタンに打ち立てようと画策しました。パキスタン軍統合情報局(ISI: Inter-Service Intelligence)はムジャヒディン組織のすべてを取り仕切りました。このように1992年から2001年にかけてアフガニスタンはムジャヒディン各派が相争う戦場となりました。パキスタンISIはこのような状況に我慢がならずイギリス情報局秘密情報部(SIS: Secret Intelligence Service、またはMI6)やアメリカ中央情報局(CIA: Central Intelligence Agency)の手助けを得て1996年にタリバン運動を生み出しました。そして彼らは南からアフガニスタンに侵略を試みたのです。パキスタン軍の直接的な介入によりタリバンはアフガニスタン国土のほとんどを占領しました。

タリバン統治下においてテロ組織アルカイダはパキスタン・アフガニスタン国境地域の部族地域にその拠点を築きました。2001年9月11日、ハイジャックされた2機の航空機がニューヨークのツインタワーに激突するまでわれわれの警告に誰も一顧だにしませんでした。あの

惨劇を体験して始めて合衆国はテロ組織アルカイダの能力と目標を始めて認識したのです。

テロにたいして戦うとの名目のもとに合衆国はNATO諸国とともにアフガニスタンに侵攻しました。タリバン政権は数週間で崩壊しました。直後に合衆国によるアフガニスタン侵略を支持する連合国の数は43に達しました。国連の安全保障理事会は決議を行いこの戦争に法的な基礎を提供しました。今年、米国とNATO諸国がアフガニスタンで戦争行為を始めてから10年目となります。これは合衆国が行った戦争のうち最も長い戦争です。今、かくも長きにわたる戦争が一体何をもたらしたのか、勇気をもって検討すべき時ではないでしょうか。

どんな結果が招来されたのでしょうか。彼らはパキスタンエリア内のテロネットワークを本当に破壊できたのでしょうか。

率直に言って、アフガニスタン国民にとってかくも長い戦争による結果は悲惨、貧窮、死以外の何ものでもありませんでした。テロとの戦いの名目の下、この地域全体の安全、安定が掘り崩されました。アフガニスタン、パキスタンおよびインドはイスラム過激派によるテロの恐怖にいつも悩まされるようになりました。どの国もテロから安全ではなくなりました。テロリストのネットワークはインドネシアからロンドン、ニューヨークまで世界中に広がりました。

テロリスト・ナンバーワンのオサマ・ビンラーディンがパキスタンISIの直接的な支援の下にパキスタンの部族エリアに拠点を構えていたことを私たちは知っています。彼らはアフガニスタン政府と外国軍に対して、自爆テロ、道路に仕掛けた時限爆弾攻撃、政府高官や無辜の市民の殺害などあらゆる手段に訴えています。テロ組織はアラブ首長らから毎年数百万ドルの資金援助を受けています。

私たちは次のような基本的な疑問に対する回答を見出さなければなりません、つまり、これらイスラム教テロ組織へ資金や武器の供給でどの国が主要支援国として振る舞っているのか？ オサマ・ビンラーディンはアフガニスタンでのソ連軍との戦闘にボランティアとして参加したのか？ むしろどこかの国の秘密諜報機関が彼らをこの地域に動員し投入したのではないのか？ グルブ

ディン・ヘクマチャールを支援したのはどの国だったのか？

機会あるごとに私を含むかつてのアフガニスタン政府指導部は、プライベートにアフガニスタンを訪れた合衆国の政治家や社会活動家に向けてこの問題に目を向けるよう注意を喚起しました。彼らとの会談の場で私たちは異なる宗派との平和共存を拒否するイスラム教組織の政策の危険性を訴えました。私たちは合衆国は戦略上の誤りを犯しており合衆国の政策は世界の安全にとって危険な結果を招く、と主張しつづけました。

当時、彼らは合衆国はイスラム教組織と何の問題も抱えていない。われわれの目標はただひとつ、君たちの政府の除去だ、と言っていました。実際このような回答は合衆国政府の苛立ちの反映にすぎなかったのです。戦術的な勝利が戦略的な敗北を招く時があります。合衆国の政策がそうでした。

9・11事件が起きた時、合衆国軍隊はアフガニスタンに対して拳骨の強さを誇示しました。アフガニスタンの村や町は再びクルーズミサイルやB-52の標的となりました。タリバン長老たちの支配は数日で崩れ去りました。この事件があってから、私や私の友人はキエフで再び合衆国の外交官と会う機会がありました。この会合で私は10年前に私がイスラム極端派にたいする不法な支援について彼らに警告したことを思い出させました。それに対する彼らの回答は“告白”でした。「われわれは間違いを犯した。われわれは君たちの政府が発した警告を真剣に受け止めなかった。われわれは君たちの政府に反感を持っていたのだ」と。

合衆国は、ニューヨークで起きたあの衝撃的な事件を体験して始めて現実の脅威がどこから来ているのかを理解しました。脅威の源はウルトラ・イスラム組織であり、部族地帯という強固な基盤のうえに組織されていたのです。パシュトゥーン部族の社会基盤が彼らを支えていました。従って脅威の源を除去するためにはパシュトゥーン部族の社会基盤を変革する必要があります。パシュトゥーン族の社会基盤を変革するためには一定の期間が必要です。いかなる政府といえども命令や法律で社会変革をなしとげることにはできません。変革のためには時間だけでなく、人びとに教育を施し、社会的インフラストラクチャー、つまり道路、電気、病院、社交施設、テレ

ビなどの情報通信網等々の建設が必要です。変革は急速には実現されえません。偏狭な古い因習を克服するためには教育を通じて科学的な知識を人びとが身につける必要があるのです。合衆国は伝統的な部族社会を変革してアフガニスタンを発達した豊かな国に変革することは短期間では不可能だと気がついたようです。

アフガニスタン・パキスタン国境地帯で戦闘が続いています。パキスタン軍統合情報局（ISI）の支援を通じてタリバンはパシュトゥーン部族地帯で支配的な地位を保っています。戦闘は明確な前線を形作ってはいません。パキスタンは戦略的な要求を持っておりアフガニスタン内政への干渉を諦めていません。従ってパキスタンはアフガニスタンに平和をもたらすための交渉をいつも真面目に行おうとはしません。自爆テロから時限爆弾攻撃にいたるまでアフガニスタン国内のいかなる軍事作戦もパキスタン軍情報局（ISI）の協力あるいは命令によるものです。アフガニスタン政府内で影響力を持っている人物はテロのメイン・ターゲットにされています。パキスタン国内に足場を置くタリバンはアフガニスタンの学校、病院、政府施設に対して休みなく破壊攻撃をしかけています。アフガニスタン南部の州では400以上の学校が閉鎖されました。麻薬の栽培・流通は年々増え続けています。この不法ビジネスには国際マフィアが関与しています。外国軍は麻薬流通を止めさせたがっていますが、タリバンにとっては恰好の資金源なのです。

合衆国がアフガニスタンにプレゼントしたいいわゆる民主主義システムは破綻しています。汚職まみれの政府をつくり出したただけでした。この政府は国民に対する基本的なサービスを実行できません。その代わりに麻薬密輸団、軍閥、犯罪者らが私腹を肥やし最終的にはアフガニスタンの政治権力を握りました。これらの肥え太った犯罪的な資本家たちはアフガニスタンの平和にとっていまや最大の障害物となっています。過去10年間、カーブルは世界のNGOの主要センターになりました。ほとんどのNGOは資金提供国に属しています。彼らはアフガニスタンの汚職ビジネスと強いつながりを持っています。これらのNGOを通じて資金の60%以上が資金提供国に環流しています。カーブルにはNGOと汚職高官たちのクモの巣が張りめぐらされており、この状況を解決する方法を見出すこと自体が困難となっています。アフガニスタンでは過去10年間に大統領選挙と国会議員選挙がそれぞれ2回実施されています。どの選挙プロセスも完全に詐欺であり選

挙法と憲法を踏みにじっています。この事実に関しては誰もが知っていることでありコメントする必要もないほどです。世界の物笑いになったこれらの選挙によって弱体な政府が形成されました。しかしこの政府はアフガニスタンの必須課題に挑戦したり、複雑に入り組んだ政治パズルを解いたりすることはできません。

米軍の撤退プロセスが始まりました。2012年夏までに3万5000人の米兵が撤退することになっています。思い返せばソ連軍はジュネーブ協定が締結された1988年にアフガニスタンからの撤退を開始しました。この年、第1陣としてソ連軍の6分遣隊が撤退しました。彼らがアフガニスタンを去る時後ろを振り返ることはありませんでした。そしてアフガニスタン政府だけがカーブルに残されました。ジュネーブ協定はソ連の面子を守るためだけのものでした。パキスタン政府はこの協定を完全に無視しました。そればかりか、パキスタンがアフガニスタン内政への干渉を強めたことはすでに誰もが知っている周知の事実です。

西側によって形成され資金援助されている現在の政府は統一を欠いています。汚職のスケールは政府部内から民間分野にまで及び計測不能なほどです。さまざまな国際評価でアフガニスタンは最悪記録に甘んじています。西側諸国の支援があるにもかかわらず軍や警察は国を守ることができません。民族・部族の憎しみや敵意が武装勢力内部に蔓延しています。これが軍や警察の武装組織がいつまでも弱体である理由です。2011年1月から同年7月までに2万4000人の兵士が任務放棄しています。今やこのような現象が常態化しています。

従って、われわれは合衆国とNATOの軍隊が撤退した後のアフガニスタンの状況について予言することが可能です。外国軍のアフガニスタン侵略はアフガニスタンの自由と独立の侵害であるだけでなく、アフガニスタン国民の文化と宗教的信条に対する侵略なのです。外国による侵略はアフガニスタン国民を鼓舞し宗教指導者の周囲に団結させ、国の防衛に立ち上がらせました。このような現象は世界のどこでも共通の現象です。故ジャワハルラール・ネール・インド首相は、獄中から娘に宛てた手紙でイギリスにたいする抵抗闘争について次のように書いています。

「一般的に、外国が侵略してきたら国を守るた

めに宗教的な信条や伝統意識は激しく強固になります。イスラム教徒がインドに侵略してきた時、ヒンズーの間でこの現象が起きました。ヒンズーカーストはより激しく強固な規制力を発揮するようになりました。現在では、ふたつの信条、つまりイスラム教とヒンズー教が外国の侵略に対して人びとを動員しているのです」

このように過去30年間、アフガニスタンはふたつの超大国に侵略されました。宗教的スローガンにもとづく侵略への反対運動が強化され堅固になり国を守ってきました。イスラム教の教えとミックスされたアフガニスタン国民の伝統と文化は、侵略に対する抵抗の源となると同時に、ネガティブな要因となって経済的社会的発展の妨げともなりました。この傾向はわが国を過去の時代に引き戻したりイスラム極端派の温床にもなりました。わが国を発展の正道に引き戻すには長い時間、あるいは歴史的な期間とも言うべき一時代が必要とされるかもしれません。歴史がそれを示すでしょうし、現時点でこの道筋を私たちが予言することは困難です。もちろん、過去の事例との関連で何かを述べることは可能でしょうが。

歴史の教訓をたどればアフガニスタンは征服者たちにとって深い嘆きの地にほかなりません。アフガニスタン人はいかなる外国の侵略にたいしても民族の違いを超えて団結し立ち向かいました。この歴史のなかから世界はアフガニスタン国民に力を行使したり脅したりすることが無駄であると悟らなければなりません。国際社会への最善のアドバイスは、内政干渉をやめアフガニスタン国民の国づくりを支援せよ、ということに尽きます。アフガニスタンの平和と安定は周辺地域に平和と安定をもたらします。

ここに発表する私の個人的な回想録は1987年から1992年の5年間を扱っているだけですが、アフガニスタンでこの30年間に何が起きたのかを研究する人びとにとって有益な視点を提供できると信じています。さらに私は多くの日本の友人に深甚なる感謝の念を表明いたします。彼らは私が日本で駐日アフガニスタン大使としての仕事を行うに際して多大の支援をしてくださいました。それは私にとって素晴らしい思い出となっています。いまは亡くなられた方もおられるとのニュースも届いておりますが、お世話になったすべての日本の方々に、ご存命であるかどうかに関わりなく、この機会を借りて重ねて衷

心からのお礼を申し上げます。

ありがとうございました。

アブドゥル・ハミド・ムータット

2011年xx月xx日

ウクライナの首都キエフにて